

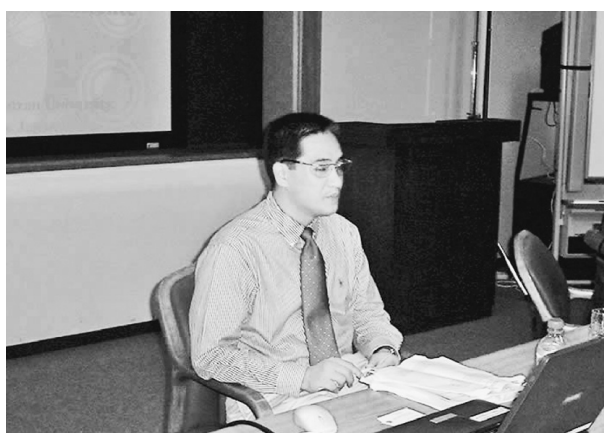
## アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2007年7月31日（火）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

報告者：Dr. Renato Cruz De Castro (International Studies Department, De La Salle University)

テーマ：“21<sup>st</sup> Century Chinese Soft-Power Statecraft in Southeast Asia: The Case of the Philippine-China Entente”



デ・カストロ氏の略歴を紹介しておきたい。デ・カストロ氏はフィリピンの対外関係、とくに比米関係の専門家で、東南アジア地域外交を専門とする。この分野でフィリピンを代表する研究者である。フィリピン大学大学院でふたつの修士号を取得後、南カルフォルニア大学大学院から博士論文 *The Post-Cold War Management of U. S. Alliances with Japan, South Korea, and the Philippines: A Comparative Analysis* により博士号を取得された。フィリピン外務省付属外交研究所 (Foreign Service Institute) を経て今日までデラサール大学で教えておられ、日刊新聞コラムニストとしても活躍されている。

要旨：中国の劇的なソフトパワー戦略外交とフィリピンの友好的対応による比中関係のかつてない黄金時代について論ずる。フィリピンは世界的潮流にのり、1975年に中国と国交を樹立、その後の比中関係は民間経済関係中心であった。フィリピンにとって中国とは、常に長期的な安全保障上、警戒すべき挑戦国（かつてのフィリピン共産党への支援や中国の海軍力増強など）と映ってきた。95年以前の中国・フィリピン関係はリアリズムの論理に依拠し、経済通商分野の成功も限られたものであった。

それより以前、92年にフィリピンから米軍事基地が撤去されるや、中国は明白な脅威となった。中国はその年領海法を制定して南シナ海を自国領海としたり、南シナ海問題でフィリピンとの対話・首脳交流の裏で、95年、97年、98年と繰り返しフィリピンが領有権を主張するスプラトリー群島に対し静かに「潜行した自己主張」の実力行動にてたりして、フィリピン政府（ラモス政権）の強い抗議と不信を招いた。

南シナ海で中国の脅威に直面したフィリピンは、撤去した米軍プレゼンスの抑止力の重要性を再確認し、98年「米訪問軍の地位協定」を締結した。比軍首脳はスプラトリー群島問題でも比米相互防衛条約による米軍介入に結び付けたり、9.11同時テロを機に比米同盟関係を再活性化させ、米軍による比国軍訓練、軍事援助、対テロ大規模演習（Balikatan）を復活させた。このように10年前までの比中関係は中国の実力行動に対しフィリピンの対中脅威感が支配した。

しかしその10年後、中国の台頭とともに中国はソフトパワー国家戦略外交へ転換し、それをフィリピンはじめ、東南アジア・ASEAN戦略として用いた。2000年エストラーダ大統領の訪中時に合意された「21世紀の二国間協力枠組み共同声明」に従い、信頼醸成措置として軍事、防衛、外交問題に関する政治的協議枠組みが設けられた。2004年アロヨ大統領訪中、これに対する2005年胡錦濤主席訪比の首脳外交の結果、以前なら考えられなかったような分野での経済援助（ルソン鉄道、インフラ建設）、技術援助（農業）、政府高官の対話協議、軍部首脳間の安全保障協議や交流、対比軍事援助、比中越3カ国間の南シナ海の海洋調査合意など、中国はソフトパワー外交を駆使して、経済的相互依存にとどまらず、政治的にもフィリピンを中国へ惹きつけようとしている。中国人民軍は比軍との軍事交流、無料の軍事援助（約250万ドルの軍装備）を申し出た。胡錦濤主席のマニラ訪問により両国関係は「フィリピンと中国の黄金時代」に達したといわれた。

このような中国のソフトパワー戦略外交の狙いはどこにあるのか。これは、中国の東アジア地域における戦略上の国益というリアリズムに即した計算である。すなわち中国の戦略目標は、フィリピンと、経済協力や軍事安全保障上の協力を深めることでフィリピンや東南アジア側の警戒心を弱め、また復活したアメリカの対フィリピン軍事的影響力の増強を抑える、アジアの米国との同盟国の米国離れを促す（テロとイラク戦争だけに専念する米国に苛立ちを感じている）、米軍事プレゼンスの介入（96年の台湾海峡危機のような）を阻止する、東南アジア地域における“中国封じ込め”を意図するアメリカの戦略的優位を出し抜いて、米軍事力プレゼンスを増強させない、など多角的側面を持つアメリカに対する対抗戦略なのである。

中国はフィリピンの貿易通商相手国の第3位に急上昇し（主に半導体輸出）、フィリピン史上初めて通商貿易上重要なパートナーになった。中国の対比借款は、大規模インフラ投資（鉄道、高架道路、空港など）により今や日本を追い抜いて1位である。

このように経済的依存が進めば、フィリピンは米国との安全保障政策、とくに「反中国同盟」の匂いがするような政策はとれず、制約を受けることになる。

結論として、中国はソフトパワー外交戦略に即して、東南アジア諸国に対し、信頼を醸成し、紛争を平和的に解決し、地域の覇権国にも脅威的存在にもならない、と協約している。アメリカが東南アジア地域で引き続いて最強大国であることに変わりはないが、このまま中国の挑戦に何もしなければ、長期的には中国のソフトパワー外交によって影響力をそがれるのは間違いない。

質疑応答では、中国外交の戦略的意図は簡単には信頼できないから、フィリピンはもっと厳しく対応すべきではないか、取り上げられた中国のソフトパワーは経済援助や軍事援助が中心だとすれば、J. Nye のソフトパワーの概念に照らして、ソフトパワーと呼べるのか、中国へ接近するフィリピンに対して、アメリカは圧力を行使しないのか、などの質問があり、デ・カストロ氏から丁寧な回答があった。

(文責 吉川洋子)